

羽仁もと子の幼児教育思想が戦後における保育の担い手にあたえた影響 —「友の会幼児生活団」と「自由学園」のフィールドワークより—

村上 博文・松永 静子*・汐見 稔幸**

研究実績の概要

本研究では、保育施設等における園の担い手研究の一環として、戦後昭和の時代において羽仁もと子の幼児教育思想が保育の担い手にあたえた影響を明らかにするために、全国の「友の会幼児生活団」（12施設）と「自由学園」に対してフィールドワークを行った。

羽仁もと子は明治の終わりに、当時は革新的である雑誌『婦人之友』を創刊し、その誌上で「幼子を発見せよ」という論文を掲載した。それが契機となり、子どもの生活に関する実態調査を娘の説子とともにに行った。2人は家庭における幼児の生活を一層充実させるために「友の会幼児部」を発足させ、その後、説子を中心となり「幼児生活団」を全国各地に開設した。戦後それはさらに展開し、活動は拡充していった。

しかし、羽仁もと子らの幼児教育思想では子どもが育つ場所として家庭を何よりも大切にされた。そのため、戦後、児童福祉法や学校教育法が制定されて以降、日本各地に就学前の幼児教育施設（幼稚園・保育所）がつくられていく中で、「幼児生活団」はその動きとは一線を画するようになっていった。「幼児生活団」では、子どもたちは週に1日通い、そこで学んだことを家庭に戻り、毎日繰り返し実践する。説子によれば、子どもは規則正しい生活をする中で心から愉快さ、自身が健康であることの心地よさを感じる。それ以外にも、音楽等の表現教育を重視したり、6歳組における鳩を飼育して飛ばしたりするなど、「幼児生活団」では独自の実践がなされていた。

また「幼児生活団」は、幼児の健全な発達とい

う観点を軸にして、家庭教育が行われていた場所でもあった。「幼児生活団」はもちろんのこと、各家庭にも、羽仁もと子らの子ども観や教育観（考えながら生活する、生活即教育、自立、本物等）は、しっかりと根付き、それが子どもを育むうえで、具現されていった。

それだけでなく羽仁らの思想は、「幼児生活団」にとどまることなく、友の会関係者をはじめ戦後における保育の担い手にも影響をあたえてきている。例えば、大阪府豊中市にて1954年にあけぼの幼稚園を開園した安家周子や沖縄県名護市の比嘉春子（娘の小松崎氏に聞き取り）、那覇市にあるみどり保育園の園長石川キヨ子らがその人物である。そうした人々の語りのなかには、羽仁らの言葉と思想が自らの保育を支えるものとして、今も生き生きと存在している。

改めて本研究の意義を考えると、それは保育の担い手研究として、これまで幼児教育の歴史において十分に位置づけられてこなかった「幼児生活団」に注目した点にある。また羽仁もと子に関する研究として、「幼児生活団」の実践からその幼児教育思想を再確認できた点も、ひとつの意義である。それは、戦前から戦時中、戦後の混乱、高度経済成長期を通じて変わることなく、「子ども」を尊重し、子どもは未来に続く存在としてとらえる幼児教育思想である。しかし思想の実践の場であった「幼児生活団」が今終止符を打とうとしている。それは羽仁らの幼児教育思想の終焉ではなく、「幼児生活団」の指導者や保育施設等の担い手の中に永遠に残り続けるにちがいない。だからこそ、その神髄をより深く考察していくことが、これからさらに求められる課題となる。

*客員研究員 秋草学園短期大学

**客員研究員 白梅学園大学 白梅学園短期大学
名誉学長